

『家族写真 3・11原発事故と忘れられた津波』

笠井千晶 (ドキュメンタリー監督・ジャーナリスト/44歳)

大賞
賞金
300
万円

第26回「小学館ノンフィクション大賞」最終候補は、現代の論客に鋭く迫った意欲作からアメリカでの家族生活を軽妙に綴った手記まで5作品が出揃った。その中から大賞は、7年にわたり被災地に通い続けるドキュメンタリー監督の労作に決定。受賞作は今春にも刊行予定。

【選考委員】右から 高野秀行氏、三浦しをん氏、古市憲寿氏

「週刊ポスト」「女性セブン」「SAPIO」主催

第26回 小学館ノンフィクション大賞受賞作発表

受賞作品のあらすじ

これほどの悲しみを、人はどう乗り越えて生きるのか。

舞台は、東日本大震災後の福島。物語の主人公は、南相馬市で津波にさらわれた我が子を探しながら生きる上野敬幸さん(47歳)。自宅があった菅浜地区は、津波で集落の7割が流失。上野さんも両親と幼い2人の子どもの家族4人を津波で亡くした。その後、22キロ先の福島第一原発が爆発する。

「ずーっとおいてきぼりだ、こは」。カメラに向かった上野さん。福島津波被災地は、原発事故が起きたために世の中から目を向けられなくなつたという。警察も自衛隊も来ない中、上野さんは避難を拒み、仲間と自力で捜索を続けた。泥の中から見つかった8歳の長女の遺体を自ら安置所に運び、3歳の長男や他の行方不明者を捜し続ける。

テレビ局に勤めていた著者は、ビデオカメラを手に休日に訪れた南相馬市で、偶然上野さんと出会った。

以来、自宅のある名古屋から夜行バスとレンタカーで片道13時間以上かけて、毎月福島に通う。そして上野さんと妻、震災の年に生まれた次女の日常に寄り添っていく。

やがて上野さんは、第一原発から3キロの大熊町で、娘の捜索をする木村紀夫さんと出会う。木村さんの捜

索を手伝ううち、原発周辺で行方不明者の捜索が十分に行なわれていないことに怒りを募らせる。そして5年9か月後、捜索に奇跡的な場面が訪れる。

一方で上野さんは、原発事故の加害者である東京電力の社員たちとも、心を通わせていく。「会社は憎いが、社員一人一人は別だ」と語る。そして南相馬市に通い続ける著者は、テレビ局を辞め、ドキュメンタリー映画を作ろうと思いつく。大切な家族を亡くした人たちの7年にわたる心の変遷を丁寧に描き出す。

受賞者の言葉

笠井千晶

「あなたに『書く』という世界を経験して欲しい」。一昨年の春、初対面の私に声を掛けてくれたのは、一人のベテラン作家だった。その勧めがなければ、私がこの作品を執筆することは

安易な想像を超えた奇跡の連続

なかっただろう。自分の表現の場はあくまでも映像の世界だと思ってきたから。思いがけず訪れた、初めてのノンフィクション執筆の機会。選んだ題材は、2年前に自主制作したドキュ



笠井千晶 (かさい・ちあき) ドキュメンタリー監督。1974年山梨県生まれ。1997年山梨放送、フリーに転じた後、2015年『Life』にドキュメンタリー映画『5回山』で第5回山崎賞を受賞。2017年『香』で第1回国際ジャーナリスト賞を受賞。

連続だった。当事者の細かな心情を執筆する際は、手元に残る映



心の襞を写し出すような筆致

今回は例年にも増して文章力が秀でた作品が揃い、それが選考を難しくさせた。「ある人の渡米記録」は、アメリカでの保育や教育のあり方を二児の母親としての立場から生き生きと描いたところや日系人がアメリカ人と日本人を結びつける重要な役割を果たしている

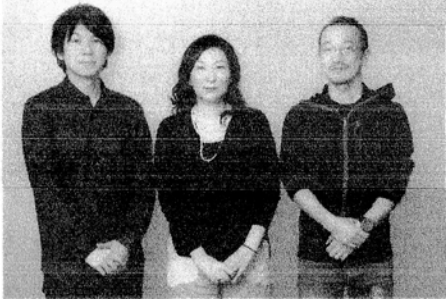
という実感などが面白かったが、夫の存在があまりに希薄であり著者一家の基本的な生活が謎に包まれていることや、全体を通したテーマがないなどが残念だった。書籍よりはブログに掲載する方がふさわしいだろう。「空気」の代弁者」は丹

高野秀行 (たかの・ひでゆき) 1966年東京都生まれ。アジア、アフリカなどの辺境地をテーマとしたノンフィクションやエッセイを多数発表。「ミャンマーの柳生一族」「謎の独立国家ソマリランド」「謎のアジア納豆」「辺境メシ」「世界の辺境とハードボイルド室町時代」(共著)。

その他の最終候補作 (タイトル五十音順)

「ある人の渡米記録」(相瀬淑子)
「大阪都構想外伝 西成区長戦記」(臣元正廣)
「『空気』の代弁者 一百田尚樹、つくる会、普通の人々」(石戸諭)
「リンちゃんへの約束 ベトナム人女児殺害事件、父親の孤独な闘い」(水谷竹寿)

熱のこもった議論を重ねた
選考委員3人。最後は、全
会一致で大賞を運出



念な取材を通して、歴代の「右派」を代表する論客が一体どういう人々なのか活写し、最後まで飽きさせない。ただし、途中からテーマが現在の右派から90年代の「つくる会」へ、さらに終盤はポピュリズムにまでぶれてしまった。現在の右派隆盛の基盤となった「つくる会」だけに焦点を絞ったら相当面白いノンフィクションになると思う。

さんのお父さんであるハオさんが著者に心を許していない。というよりも、リンちゃん殺害の被疑者(被告)は罪状を否認しており裁判も続行中で、まだ事件が収束していないように見える。裁判が一段落して、ハオさんの心境が変わったときに再度、執筆・書籍化したらどうだろうか。

三浦しをん 涙と怒り、恥ずかしさを覚えた

(作家)

『大阪都構想外伝』は、文章にユーモアがあって読みやすく、身近なレベルでの政治や行政に関心を持ち、みんなで知恵を出しあって行動していく大切さを楽しく伝えてくれる。ただ、ややエピソードの羅列っぽく感じてしまっているのが惜しい。

さなかつた。日本で暮らすベトナムのかたたちのコミュニティについてもっと知りたいなと感じたので、まずはそちらを重点的に我々読者に伝えていただきつつ、取材を続行されるのはいかがでしょうか。

三浦しをん(みづら・しをん) 1976年東京都生まれ。2006年『まほろ駅前多田便利軒』で直木賞を、12年『舟を編む』で本屋大賞を受賞。著書に『風が強く吹いている』のほは通信『愛なき世界』などの小説のほかエッセイ集も多数。近著に『のっけから失礼します』

(徐々に取材対象者と親しくなっていくという構成は現状のままでもいい)、作品の精度が上がるはずだ。

古市憲寿

共通していた主題の不明瞭さ

実は選考会が始まる直前まで「これ」という一作品を決められなかった。『家族写真』は、東日本大震災を経験したある家族の記録。8年にわたる日々が丁寧に綴られていく。何度か現地足を運んだ著者から書けた作品なのだろう。力作なのは間違いない。た

だし、何を描きたいのかが中々焦点を結ばない。著者の発案である「家族写真」をタイトルにするのも少し無理があると思った。もう一作品、大賞として推すか最後まで迷ったのが『空気』の代弁者。冷静な取材や分析を元にした確かな筆力。実は『日本国紀』

と『FACTFULNES』が併買されているなど、提示するデータの選び方にもセンスを感じる。しかし分析視座がかつて小英二の提示した「普通」という言葉に引きずられすぎているのではないか。また「右派市場」の源流を探るという趣旨なら伊藤昌亮『ネット右派の歴史社会学』(青弓社)といった力作に軍配が上がる。

『リンちゃんへの約束』は、随所に「プロ」らしさが光る作品。クラスでの机の上の花を置くかどうかのやり取り、タクシー運転手の心ない一言など、情報の切り取り方が上手だった。ただし今も裁判がある種の「告発」として世に問う意味はあると思うが、「ノンフィクション賞」とは相性が悪いように感じた。

『大阪都構想外伝』は、一言でいえば「勿体ない」。せっかくなら内部から観察できる立場にあったにもかかわらず、記述がどこか表層的なのだ。たとえば作中ではある怪しい噂について言及されるが、それを解明してこそそのノンフィクシ

【小学館ノンフィクション大賞事務局より】第26回をもって3人の選考委員は任期を終え、次の第27回から新たな選考委員へと交代します。新選考委員は、星野博美(ノンフィクション作家)、白石和彌(映画監督)、辻村深月(小説家)の3氏。ご応募、お待ちしております。